

日本における北米先住民研究の歴史と現状

Trends in Native North American Studies in Japan

歴史学分野 History

佐藤 円
SATO Madoka

はじめに

日本における北米先住民¹史研究は、1960年代から激化したアメリカ合衆国（以下アメリカと略す）における先住民の自決運動や歴史研究におけるマイノリティー史研究の興隆に触発されて、1960年代の後半から本格化した。それからすでに40年ほどの年月が経過し、研究の蓄積も進んだ現在、改めてこれまで行われてきた研究の全体を俯瞰したとき、そこにはどのような特徴と課題が見出されるのであろうか。筆者はそれを検討するために、議論の前提として、これまで日本において刊行されてきた北米先住民史研究に関わる文献を可能な限り網羅した文献目録の作成を試みた。本論に入る前に、文末に添えたその文献目録について、あらかじめ説明を加えておきたい。

今回作成した目録には、原則として日本で刊行された北米先住民に関する著書、論文、解説文、翻訳書、翻訳論文等のうち歴史学的研究に分類される文献を採録した。またそれに加え、人類学や社会学といった歴史学と隣接する学問分野の文献やジャーナリスティックな文献も、北米先住民の歴史学的研究に資すると判断したものについては、著書を中心に採録した。ただし、新聞や雑誌等の短い記事や個人的な体験を主観的に記録した紀行

文は除外することにした。

ところで、目録に採録した文献が研究対象としている先住民であるが、主として北米大陸のうち現在のアメリカとカナダが含まれる地域に暮らしていた先住民であることを断っておかなければならない。当然のことながら、北米先住民にはメキシコ及び中米の先住民も含まれるが、その地域の先住民史研究まで渉猟することは、アメリカ史を専門とする筆者の力量を超えるため、今回は現在のアメリカとカナダが含まれる地域の先住民を研究対象とした文献に限定せざるを得なかった。

次に、目録の作成に利用した情報源であるが、主なものは以下の通りである。井出義光他編『アメリカ研究邦語文献目録——歴史・政治・経済』（東京大学出版会、1973年）、立教大学アメリカ研究所編『アメリカ研究邦語文献目録Ⅱ——歴史・政治・経済・文学 1970～74』（東京大学出版会、1976年）、アメリカ研究邦語文献目録編集委員会編『アメリカ研究邦語文献目録Ⅲ——歴史・政治・経済・文学 1975～79』（東京大学出版会、1982年）、東京大学アメリカ研究資料センター編『アメリカ研究邦語文献目録Ⅳ——歴史 1980～85』（東京大学アメリカ研究資料センター、1987年）、立教大学アメリカ研究所編『アメリカ・インディアン研究邦語文献目録 1945～1987』（『アメリカ研究シリーズ』[立教大学アメリカ研究所] 10号、1988年）、横須賀孝弘編『目録・北米インディアンの本』（私家版、1999年）、「GeNii 学術コンテンツ・ポータル（国立情報学研究所）」<http://ge.nii.ac.jp/>、「NDL-OPAC 国立国会図書館蔵書検索・申込システム」<http://opac.ndl.go.jp/>。

実際の目録作成作業は、上記の情報源のうち、まず既存の文献目録から必要な文献の情報を抜き出し、基礎となる目録を作成した上で、新しい文献の情報や既存の文献目録にある情報の不備をウェブ上の検索サイトによって確認しながら補っていくという手順で進めた。目録には可能な限り文献の情報を採録したつもりであるが、依然として重要な文献が落ちている可能性がある。その場合には、将来目録を改訂して再度刊行する予定があるため、ぜひ次の連絡先まで情報をお寄せいただきたい。（連絡先：mdsato@otsuma.ac.jp）

1. 先住民史研究の始まり（1960年代後半～1970年代半ば）

先に述べた通り、日本における北米先住民史研究は1960年代後半から本格化した。北米先住民に対する歴史学的関心が、それ以前に全く存在しなかったというわけではない。早くも1950年代に三崎敬之がピークォート戦争を題材に、先住民に対する征服活動のアメリカ史における意味について検討を加えていたことは、その先見性において刮目に値する（三崎1953）。しかしその他には1964年に富田虎男が19世紀のアメリカン・デモクラシーについて「インディアン」や「黒人」の立場から検証することの重要性について論じるまで（富田1964）、日本の歴史研究者が北米先住民の問題を取り上げることはほとんどなかった。その背景には、伝統的に歴史学が史料に基づく実証性を重視する学問とされてきたため、文字が無く、自らの歴史を記録した史料を持たなかった北米先住民は研究対象とは見なされず、彼らのような「未開人」の研究はもっぱら人類学が行うものであると考えられていたこと、そして当時の日本のアメリカ史やカナダ史の研究者の多くが社会的マジョリティーであるヨーロッパ系の人々の歴史にばかり注目し、先住民のことをヨーロッパ系による開拓と発展の歴史の背景としてしか認識せず、先住民がアメリカやカナダの歴史に果たしてきた主体的な役割などほとんど顧みなかったという事情があった。

しかしこのような日本の歴史学界における北米先住民研究に対する理解や歴史研究者たちの偏った歴史認識は、1960年代にアメリカにおいて激化した先住民の自決運動や女性を含むその他の社会的マイノリティーによる復権運動と、それに呼応したマイノリティー史研究の興隆によって、根本的に修正を迫られることになった。当時アメリカでは各種の運動を展開していたマイノリティーたちが、それまでのマジョリティー中心の歴史観や歴史像が、現実の社会の差別意識や差別構造を温存させる一因となっているとして、その修正を要求し、またその実現のためにはマイノリティーや被抑圧者の視点に立った歴史研究の発展が不可欠であると主張していた。これに対し、そのような要求や主張の政治的・学問的意味を鋭敏に感じ取ったアメリカ、或いは日本の歴史研究者たちが積極的にマイノリティー史研

究に乗り出すようになり、これまでの歴史研究のあり方を問い直すような研究が盛んに発表されるようになっていった。例を挙げれば、1970年にアメリカで刊行され、1972年には日本語訳も刊行されたディー・ブラウンの北米先住民抵抗史『わが魂を聖地に埋めよ』（ブラウン 1972）が先住民史研究のものとしてはその典型である。このような学問的潮流のなか、日本における北米先住民史研究も次第に本格化していったのである。

先に挙げた1964年の富田の研究はまさにその先駆けであったが、1960年代後半になると、さらに富田が個別研究や北米先住民史の概説を発表する一方で（富田 1968, 1969a, 1969b）、清水知久がその著書『アメリカ帝国』に「インディアン」と題する一節を設け、アメリカ史を帝国の形成と発展の歴史と捉えるアメリカ帝国論の視点から先住民の歴史をアメリカ史のなかに位置づけてみせた（清水 1968）。清水はそこで展開した議論をさらに発展させ、1971年には日本では初めての北米先住民の通史を刊行したが、そのなかで、当時アメリカで激化していた先住民の自決運動が、いかに先住民の厳しい歴史的経験と深く結びついたものであるのかを、運動の当事者である先住民の言葉を引用しながら鮮やかに描き出した（清水 1971）。他方富田も、1974年に清水、高橋章と共に著した『アメリカ史研究入門』において、北米先住民史研究の動向を紹介しながら、帝国の歴史としてのアメリカ史理解には北米先住民史研究の発展とそこから得られる知識が不可欠であると論じるとともに、「われわれがインディアンの歴史を学ぶ場合、インディアンの解放を支持する側に立つのかどうかを、まずはっきりさせておかなければならないであろう。しかし、インディアンの解放を支持する側に立つといっても、それは言葉の問題でしかない。われわれ日本人自身が、かつてアジアの諸民族を侵略し植民地化し、そして未解放部落やアイヌや沖縄の人びとにたいする差別と、ベトナム、朝鮮をはじめとするアジアの人びとにたいして、古い偏見に加えて新しい偏見を育てつつ民族的差別を加えているとき、差別されたインディアンや黒人の立場に自分を同一化することは絶望的なほど困難なことである」²と、北米先住民史研究を行おうとする日本人研究者の視点に対して厳しい問題提起を行った（富田 1974, 1980）。これらの富田と清水の諸研究は、北米先住民の歴史を研究すること

が、民主主義国家のモデルを自任してやまないアメリカが抱える人種差別や覇権主義といった構造的な矛盾を明らかにする上で役立つばかりか、その矛盾に満ちたアメリカがつくり上げた支配体制に追随し続ける日本人の姿勢そのものを問い直すことにもなるという鋭い問題意識に支えられたものであった。

しかしこのような問題意識は、ただ富田や清水だけのものではなかった。富田や清水の諸研究が発表されたのとほぼ同時期に、歴史研究者以外の人々からも同様の問題意識に基づく著書が刊行された。一つはジャーナリストの本多勝一が著した『アメリカ合州国』であり（本多 1970）、もう一つは化学者である藤永茂が著した『アメリカ・インディアン悲史』である（藤永 1972）。前者において本多は、アメリカ南西部に暮らす先住民への取材を通して感得した先住民の視点からアメリカ史を捉え直すことの重要性について説き、後者において藤永は、北米先住民史上の重要な出来事や人物について紹介しつつ、「インディアン問題」が持つ普遍性と日本人のそれとの関わりについて論じた。富田や清水の諸研究に加えこれらの著書こそ、日本における北米先住民史研究の出発点であった。

2. 基礎研究から個別研究へ（1970年代半ば～1980年代）

1960年代の後半から本格化した日本における北米先住民史研究は、1970年代の半ばから80年代にかけて基礎研究が充実するとともに、特定の問題に焦点をあてた個別研究も発表されるようになった。

まず、この時期に刊行された代表的基礎研究としては、偶然にも同じ1977年に刊行された本間長世が解説し、平野孝が訳した北米先住民史史料集『アメリカ・インディアン』（本間 1977）、ジャーナリストのジョン・コスターが著し、清水知久が翻訳した現代史に重点を置く通史『この大地、わが大地』（コスター 1977）、スミソニアン研究所の北米先住民史研究者であるウィルコム・E・ウォッシュバーンが著し、富田虎男が翻訳した通史兼研究入門書の『アメリカ・インディアン』（ウォッシュバーン 1977）の三つが挙げられる。これらのうち史料集である『アメリカ・インディアン』は、主として「白

人」側のものであるとは言え、北米先住民史研究には欠かせない基本史料を翻訳し編纂したものであった。その刊行により、同様の史料集としては、先住民側の史料のみを採録したC・ハミルトン編の『滅びゆくインディアン』（ハミルトン 1969）しかないという状況が改善された。またコスターとウォシュバーンの通史は、非常に詳細な内容で、北米先住民史全般に関してより詳しい情報を求める読者の需要を満たすものだった。さらにこのような通史としては、1980年代に入ると、富田虎男が北米先住民史研究上の重要なテーマに焦点をあてながら綴った『アメリカ・インディアンの歴史』が刊行され（富田 1982a）、また著名な北米先住民史研究者のウィリアム・T・ヘーガンの著した通史『アメリカ・インディアン史』も西村頼男らによって翻訳された（ヘーガン 1983）。これらの著書の刊行によって、これから北米先住民史研究を始めようとする者にとって恰好の入門書が出揃った。

以上のように通史を中心とする基礎的な研究が充実する一方で、先に述べた通り、1970年代半ばから80年代にかけては、特定の問題に焦点をあてた個別研究も発表され始めた。まず法学者の上田伝明が、強制移住後にチェロキーが制定した憲法やアメリカの法制度と先住民の関係について論じた一連の研究を相次いで発表した（上田 1974, 1979b, 1983, 1988）。また本来はフランス文学が専門でありながら、アメリカに住む間に先住民の歴史に関心を持つようになった加藤恭子が、植民地時代にニューイングランドで発生したフィリブ王戦争について現地調査を行い、それを著書にまとめた（加藤 1974）。一方歴史研究者では、島川雅史がジェファソンの先住民観と彼が展開した先住民政策の関係について考察し（島川 1978）、白井洋子が留学先であったペンシルベニアが植民地時代に展開した先住民政策の特色や先住民との毛皮交易の歴史的な意味について論じ（白井 1981, 1987, 1989）、藤本博が1830年のインディアン強制移住法の制定過程について分析した（藤本 1984）。またこれらに加え、折原卓美が19世紀前半のインディアナにおける先住民政策とそれに連動した土地投機業者の活動について明らかにし（折原 1985）、小山起功が、チェロキーが行っていた黒人奴隷制に関するアメリカでの研究動向を紹介した（小山 1985）。以上のようなアメリカの先住民に関する研究に対し、カナダの先住民については、竹中豊が現地での研究を

もとに「白人」側の先住民観の変遷について史学史的に検討を加えるとともに、フランス系と先住民のヒューロニアにおける接触の文化的意味についても分析を行った（竹中 1983a, 1983b）。

このように新しい個別研究が発表されるなか、それまで日本の北米先住民史研究を牽引してきた富田虎男も、前述した通史に加え、特定の問題に焦点を当てた個別研究を精力的に発表し続けた。そのうち特に幕末に日本へ密航し、長崎で抑留中通詞たちに英語を教えた北米先住民の血を引くラナルド・マクドナルドについて現地調査によってその足跡を明らかにした著書（富田 1979c）や、江戸時代の日本人の北米先住民に対するイメージについての検討（富田 1986b）、或いは 19 世紀末に日本政府がアイヌ対策として制定した北海道旧土人保護法と、同時期にアメリカ政府が先住民向けに制定したドーズ法の比較史的な分析（富田 1989, 1990）などは、日本人と北米先住民の歴史的関係を問い直そうとする富田の問題意識が強く現れたものだった。

以上のような個別研究の登場は、この時期の日本における北米先住民史研究が、アメリカにおける研究を紹介することで、その学問的な重要性を社会に認知させようとする啓蒙の段階から、研究者それぞれがその問題関心に従って独自のテーマを設定し、場合によっては直接現地へ赴き、調査・研究を行う段階へと移行しつつあったことを示していた。

3. 研究の多様化（1990 年代～）

日本における北米先住民史研究は、1990 年代以降、量的にも質的にもさらなる発展と変化を遂げた。特に発表される研究の量は、本稿に添付した文献目録をもとに作成した表 1 に示した通り、10 年間に約 50 の研究が発表されるペースだった 1970 年代や 1980 年代と比較すると、1990 年代の 10 年間には 129 を数え、2000 年代でもすでに 100 を超えようとしており、急増している。またその内訳を見ると、1990 年代の研究の約 60 パーセント、2000 年代の研究の約 70 パーセントは論文等に分類されるものであり、著書や翻訳書の刊行数に大きな変化がないのに対し、その増加が顕著な特徴と

表 1. 日本におけるアメリカ先住民史研究の量的変化（1950年代～2000年代）

	著書	論文等	翻訳書	翻訳論文等	合計
1950年代	0	2	0	0	2
1960年代	2	6	2	0	10
1970年代	13	22	14	1	50
1980年代	15	26	6	6	53
1990年代	22	81	16	10	129
2000年代	15	70	7	3	95
合計	67	207	45	20	339

註：本稿末の文献目録をもとに作成

なっている。これは1990年代以降、日本において北米先住民史研究に携わる研究者の裾野が急速に広がったことを暗示している。

一方、1990年代以降に発表された研究の質的な変化について見てみると、その最大の特徴は、研究の多様化にある。この多様化とは、研究が対象とする先住民や地域、或いは時代の多様化だけを意味するのではなく、研究が取り扱う事象や、それに応じて用いられる研究の枠組みや視点の多様化をも意味している。すでに1990年代以前の研究においても、研究者それぞれの問題関心によって研究対象となる先住民、地域、時代、事象、そして用いられる研究の枠組みや視点は様々であったが、1990年代以降、特に個別研究が増加するなか、その多様化が一層進行した。またこの多様化と同時に、それぞれの研究の細分化と詳細化も進んだ。利用可能な史料に制約があり、直接現地で調査・研究することも困難であった時代とは異なり、1990年代以降はIT技術の発達による情報収集の簡便化や現地調査及び留学の機会の増大によって、日本で発表される北米先住民史研究も現地における研究と同様に、ある時代の特定の事象について、一次史料を用いながら詳細に行われるものが多くなっていった。以下、そのように変化した1990年代以降の個別研究のなかから代表的なものを、取り扱っているテーマや研究分野ごとに紹介していきたい。

まず、日本における北米先住民史研究において一貫して強い関心を集め

てきたアメリカ政府の先住民政策史に関する研究であるが、その代表としては、1990年代前半から精力的にこの分野の研究に取り組んだ鶴月裕典の研究が挙げられる。鶴月は、北米先住民が被った苦難の歴史的意味を理解するためには、ただ「白人」を強欲な征服者として非難するだけではなく、彼らが展開した先住民政策の背後にある論理と、それに抵抗した先住民側の論理の解明が不可欠であるとして、啓蒙的な概説から特定の時代の政策を扱った個別研究まで幅広く先住民政策について論じた（鶴月 1990a, 1992, 1993a, 1993b, 1993c, 1993d, 1994, 2007）。鶴月は個別の政策研究では、主として19世紀前半の強制移住政策について論じたが、この強制移住政策や同時期の先住民「文明化」政策について、特に先住民側の対応に焦点を当てて検討したものに拙論（佐藤 1990, 1997, 1998）と岩崎佳孝の研究がある（岩崎・岡本 1997, 岩崎 1999b, 2001）。

以上のような19世紀の政策史研究に対し、水野由美子は20世紀前半に展開された先住民政策改革運動に着目し、教育、先住民文化、土地などに対する先住民の権利をめぐる議論に焦点を当てながら、やはり政府側のみならず政策の対象とされた先住民側の動向について分析を試みた（水野 1997, 2000, 2002, 2004）。このように先住民政策について論じる際、政府側だけではなく先住民側の動向についても積極的に検討するという研究姿勢は、アメリカ政府の先住民に対する言語政策を通史的に概観した伊藤聰（伊藤 1995）や近年の言語保護政策や宗教保護政策について論じた内田綾子（内田 2001, 2005a）、さらにはインディアン再組織法について検討した野口久美子（野口 2003, 2005）にも共通しており、今日の先住民史研究者にとって、政策の対象とされた先住民側の主体性の解明がいかに重要な課題と認識されているかが窺える。

ところで、この先住民政策史研究のなかには、先に述べた通り、富田虎男によって始められた先住民政策の日米比較という分野がある（富田 1989, 1990）。この分野の研究としては、その後も、19世紀前半のアメリカにおける先住民の強制移住と19世紀末の樺太アイヌの強制移住を比較した鶴月裕典の研究や（鶴月 1990b）、明治期のアイヌに対する教育政策と土地政策を同時期のアメリカの先住民政策と比較した黒岩裕の研究（黒岩 1993）、そして

19世紀前半のアメリカにおける先住民の強制移住と20世紀初頭の日高地方におけるアイヌの強制移住についての比較した上田伝明の研究が発表された(上田 2001, 2002)。しかし、この種の研究に利用できる日本側の史料に制約があるためか、北米先住民史研究の意義を直接日本社会に問いかける重要な分野でありながら、上記のもの以外には後続の研究がなかなか現れない状況にある。

以上のようなアメリカを対象とした先住民政策史研究に対し、カナダの先住民政策史については、歴史学ではなく他の学問分野において、今日の問題を検討する際の背景として論じられている場合が多い。例えば政治学者の加藤普章は、カナダの連邦主義体制における先住民の法的地位や政治的立場に関する研究において、カナダの先住民政策史についても概説しているし(加藤 1990)、やはりカナダ政治が専門である鈴木健司も、ケベックの分離独立問題と先住民の関係について検討する際に、ケベックの先住民政策の変遷について歴史的な考察を行っている(鈴木 1998, 2005)。またこの他にも、カナダ文学が専門の浅井晃が先ごろ刊行したカナダの先住民に関する概説書においても、カナダの先住民政策史について多角的に論じられている(浅井 2004)。

次に、先住民政策と同様に北米先住民史研究において強い関心を集めてきた先住民との毛皮交易に関する研究であるが、まず注目すべきは下山晃の研究である。下山は当初アメリカの植民地時代の毛皮交易について研究していたが、次第にその射程をアメリカ大陸以外の地域にも拡大していき、世界各地で展開されていた毛皮交易の先住民に対する収奪システムとしての側面を「世界システム論」的見地から検討し、それを著書にまとめた(下山 1990, 1993, 1994, 1995, 1996, 1997, 2005)。一方カナダ史研究者である木村和男も、当初先住民との毛皮交易に関してハドソン湾会社の活動に焦点を当てた研究を行っていたが、次第にその研究対象を北太平洋沿岸で各国が展開したラッコ交易に広げていき、その世界史的意味について、やはり「世界システム論」的視点から論じた(木村 2002, 2004, 2007)。このように毛皮交易の経済的研究が地域横断的な広がりを見せるマクロな研究となるのに対して、特定の地域で行われた毛皮交易について、特定の時代の文脈

で分析するミクロな個別研究も依然として続けられた。例えば、白井洋子は1990年代に入っても植民地時代のペンシルベニアにおける毛皮交易と同地の先住民政策の関係について論じたし（白井1991）、澤田俊明は19世紀前半から半ばにかけての西部におけるクロウとブラックフィートとの毛皮交易について概説し（澤田1996, 1999a, 2002）、岩崎佳孝は植民地時代にチカソーに受け入れられた「白人」トレーダーについて検討を加えた（岩崎2000a）。

以上のような政策史研究や毛皮交易史研究が、その研究成果の蓄積から見て、日本における北米先住民史研究ではオーソドックスな研究分野であるとするならば、以下で紹介する先住民女性史研究や先住民と「公的記憶」をめぐる研究は、先住民史研究以外の歴史研究からの刺激を受けつつ、1990年代以降に登場した新しい研究分野である。

まず先住民女性史研究であるが、一般のアメリカ女性史研究が日本でも1970年代以降急速に発展していった一方で、その一翼を担うはずの分野でありながら、必ずしも同様には発展していかなかった。その背景には、当初日本におけるアメリカ女性史研究が、主として「白人」女性を対象とした研究であったという事情がある。しかしそのような研究状況に対する批判から、1990年代以降アメリカ「黒人」女性史研究をはじめとするマイノリティー女性史研究が日本でも本格化し、その潮流の中で先住民女性史研究も少しずつ現れるようになった。その先駆けである坂本ひとみの研究は、先住民女性の先住民社会における役割とその歴史的な重要性を説いたものであったが（坂本1996, 1997）、2000年代に入ると、石井泉美が留学中アメリカで先住民女性史研究に直接触れた成果を個別研究としてまとめ、さらにはアメリカにおけるジェンダー概念を使った先住民女性史研究の動向についても紹介した（石井2001, 2005, 2006）。このようなジェンダー概念を先住民女性史研究に導入する試みとしては、先住民女性と「文明化」の関係を検討した拙論もその一例である（佐藤2001, 2004a）。ただし、以上の研究の他には依然として個別研究はなく、先住民女性史研究は今後のさらなる発展が待たれる状況にある。

次に、先住民と「公的記憶」をめぐる研究であるが、近年のアメリカ史

研究において活発に交わされている「公的記憶」をめぐる議論に、先住民史研究の立場から一石を投じるものである。そもそもアメリカにおける「公的記憶」とは、本来多様な国民を抱えるアメリカという国家の政治的統一を保証する役割を担ってきたものだが、その一方で歴史の相対化を阻み、ナショナリズムや多数派のエスノセントリズムを背景にした偏狭な歴史観の醸成にも貢献してきた。内田綾子は、このようなアメリカの「公的記憶」に、先住民の歴史とそのヴァナキュラーな「記憶」はどのように対抗し、或いは接合され得るのかという問題について、近年の先住民の聖地や史跡の記念のあり方をめぐる対立に焦点を当てて分析を試みた（内田 2000a, 2004）。他方文学及び表象研究が専門である鈴木透も、内田とはほぼ同じ観点から、先住民の歴史や「記憶」を包含した「公的記憶」を再構築する可能性とその意義について、内田も取り上げたりトルビッグホーン戦跡を題材にして検討を加えた（鈴木 2004, 2005）。これに対し白井洋子は、博物館展示による先住民イメージや「公的記憶」の構築のされ方について、スミソニアン国立アメリカ美術館が開催した西漸運動に関する企画展の内容をめぐる論争を材料に議論を展開した（白井 1996）。このような先住民と「公的記憶」の関係をめぐる議論は、他のマイノリティー集団を扱った同種の議論と同様に、今後も公的なアメリカ史像の再編をめぐる異なる歴史観のせめぎ合いのなかで続けられていくものと思われる。

おわりに

以上のように 1990 年代以降、日本における北米先住民史研究は量的に増大し、質的には多様化、細分化、詳細化が進んだ。しかしその状況を、研究の「発展」として手放しで喜べるかと言えば、やや不安な点もある。なぜなら多くの学問分野で起こっていることと同様に、研究の増大とそれに伴う多様化や細分化は、その結果として研究の蝸壺化をもたらす危険があるからである。それぞれの研究者が、自己の研究にのみ拘泥し、ただその詳細さや独自性のみを誇り、他の研究者がどのような研究を、どのような問題意識に基づいて行っているのか知らず、また自己の研究と他の研究が

どのような関係にあるのかにも関心を払わないとするならば、はたしてそのような研究分野に本当の意味での発展はあるのだろうか。もちろん日本における北米先住民史研究が現在そのような状況に陥っているとは考えていないが、ある程度の研究者がすでに存在し、またその背後にはこれから研究の道に入ろうとする研究者予備軍が存在すると想定される以上、日本における北米先住民史研究も、研究の蝸壺化を防止しつつ、さらなる発展を期すために、研究者間の交流を促進し、研究者同士の協力関係を構築していくことが求められているのではないだろうか。

もちろんそのような協力関係は、同じ北米先住民史研究者の間のみならず、他のアメリカ史やカナダ史の研究者との間でも、また他の学問分野の先住民研究者との間でも構築する必要があるだろう。個人的な経験から言えば、先年アメリカにおける先住民とアフリカ系アメリカ人の歴史的関係について検討した際に（佐藤 2005c）、アメリカ「黒人」史研究の成果から多くの情報を得たし、人類学や社会学の北米先住民に関する研究成果からも多くを学んだ。また研究における自己の問題意識を明確化する際にも、特に近年歴史研究者以外の北米先住民研究、例えば石山徳子、阿部珠理、鎌田遵といった現在の先住民が抱える問題を現地調査に基づいて検討している人々の研究から重要な示唆を受けている（石山 2004; 阿部 2005; 鎌田 2006）。かつて、歴史学として研究するには史料が乏しいために人類学が行うものとされてきた北米先住民研究に、あえて歴史研究者が乗り出そうとしたとき、研究者たちは人類学をはじめとする隣接諸科学の研究成果から積極的に学び、その方法論を援用することで研究上の制約を打ち破ろうとしてきた。しかし、そのような先住民史研究のあり方は決して過去のものではなく、研究対象や研究の枠組みが多様化した現在、以前にも増して他の研究分野へ協力を求め、研究を学際化していく必要性が出てきているのではないだろうか。

そのような研究状況を考えるとき、2006年のアメリカ学会年次大会において、アメリカ先住民研究分科会が発足したことは、実に時宜を得た出来事であった。今後はこの分科会を基盤に、研究者の交流が進み、研究者同士の協力関係が築かれていくなれば、日本における北米先住民史研究のみ

ならず、北米先住民研究全体が本当の意味で発展していくことは間違いないだろう。

最後に、筆者がこの新たに発足したアメリカ先住民研究分科会における研究者の交流に特に期待している点を述べて、まとめに代えたい。それは研究の基盤となる問題意識の切磋琢磨という問題である。日本における北米先住民史研究は、先に述べた通り、その始まりにおいて、非常に厳しい問題意識を内包していた。はたして現在数多く発表されている研究は、そのような問題意識をどれほど継承しているのだろうか。或いはまた自らの研究のあり方を問うような、今という時代が生み出す新たな問題意識をどれほど提示しているのだろうか。このような問いを研究者同士が投げかけ合える場としてアメリカ先住民研究分科会が機能すれば、今後どのように研究が多様化し、細分化していったとしても、研究者同士が議論を交わす共通基盤が失われず、それぞれの研究が蛸壺化していくことはないであろう。アメリカ先住民研究分科会が、歴史研究者のみならず多様な北米先住民研究者たちが直接語り合い、お互いの問題意識を磨き合う場として発展していくことを願いつつ、小論をおわりたい。

付記：本稿はアメリカ学会第40回年次大会第1回アメリカ先住民研究分科会（2006年6月11日）における報告をもとに執筆したものであり、以下の文献目録は報告の際に配布した目録に加筆・訂正を施したものである。

註

¹ 小論で用いられる北米先住民という呼称は、本来ヨーロッパ系の人々が到来する以前から北米大陸のあらゆる地域に居住していた先住民と、その子孫を指す総称であるが、小論では本文中（74頁）でも断わっている通り、主として現在アメリカ合衆国とカナダとなっている地域に居住していた先住民と、その子孫を指して用いている。また小論では、文脈によって「インディアン」という誤解に基づいて生まれた呼称を使用する場合や、「黒人」「白人」といった近代の歴史が構築してきた「人種」概念に基づく呼称を使用する場合には、カギ括弧を付すことで、学問的に、或いは政治的に問題を含む呼称であるという筆者の認識を表すこととした。

² この引用部分は1980年の『アメリカ史研究入門』の第2版に従ったものである。1974年の初版の引用に該当する部分は「われわれがインディアンの歴史を学ぶ場合、インディアンの解放を

支持する側に立つのかどうかを、まずはっきりさせておかねばならないであろう。しかし、インディアンの解放を支持する側に立つといっても、それは言葉の問題でしかない。われわれ日本人自身が、かつてアジアの諸民族を侵略し植民地化し、そして未解放部落・アイヌ・沖縄の人びとにたいする民族内差別と、ベトナム、朝鮮をはじめとするアジアの人びとにたいして、古い偏見に加えて新しい偏見を育てつつ民族的差別を加えているとき、差別されたインディアンや黒人の立場に自分を同一化することは絶望的なほど困難なことである（下線は筆者による付記）」となっており、第2版とは下線を付した部分が異なっている。このうち「民族内差別」（初版）から「差別」（第2版）への変更は、小論の文脈へ与える影響は少ないものの、富田の民族としての「日本人」に対する認識の変化を示す重要な変更であり、またそのような富田の認識の変化に賛同する立場から、本文ではあえて第2版の文章を引用し、このような註を付してその理由を説明することとした。

日本における北米先住民研究文献目録 歴史学分野

アードス, R、A・オルティス（編）

1997 『アメリカ先住民の神話伝説』上・下巻（松浦俊輔他訳）青土社。

青木晴夫

1972 『滅びゆくことばを追って——インディアン文化への挽歌』三省堂。

1979 『アメリカ・インディアン——その生活と文化』講談社。

青柳清孝

1976 「新大陸とインディアン」猿谷要（編）『総合研究アメリカ1——人口と人種』研究社、pp. 4-38.

1982 「部族のアイデンティティ——オクラホマのアナダーコーとその近辺のインディアン」綾部恒雄（編）『アメリカ民族文化の研究——エスニシティとアイデンティティ』弘文堂、pp. 51-82.

1999 「大都市シカゴとインディアン——都市先住民社会史への試み」青柳清孝、松山利夫（編）『先住民と都市——人類学の新しい地平』青木書店、pp. 213-228.

2006 『ネイティブ・アメリカンの世界——歴史を糧に未来を拓くアメリカ・インディアン』古今書院。

赤澤 威他（編）

1992 『アメリカ大陸の自然誌2——最初のアメリカー人』岩波書店。

秋元英一

1991 「アメリカ史における地域と経済——経済史の方法論にかんするノート」高浦忠彦、西川純子（編）『近代化の国際比較——経済史的接近』世界書院、pp. 5-19.

1995 「インディアンの経済とヨーロッパ人の経済」秋元英一『アメリカ経済の歴史——1492 - 1993』東京大学出版会、pp. 8-14.

浅井 晃

2004 『カナダ先住民の世界——インディアン・イヌイット・メティスを知る』彩流社.

阿部珠理

1994 『アメリカ先住民の精神世界』日本放送出版協会.

1997 「ボカホントスあるいは神話の超克」後藤昭次（編）『文学と批評のポリテイクス——アメリカを読む思想』大阪教育図書, pp. 43-56.

2001 「犬でも狼でもなく——ラコタ・スー族におけるエスニック・アイデンティティの創造」宇野邦一、野谷文昭（編）『マイノリティは創造する』せりか書房, pp. 179-200.

2002 「先住民文化再生への視座——自立と尊厳の回復に向かって」西村頼男、喜納育江（編著）『ネイティヴ・アメリカンの文学——先住民文化の変容』ミネルヴァ書房, pp. 39-56.

2005 「ラコタ・スー——七世代目の民族再生へ向けて」富田虎男、スチュアート・ヘンリ（編）『講座世界の先住民文化——ファースト・ピープルの現在——07 北米』明石書店, pp. 119-135.

2005 『アメリカ先住民——民族再生にむけて』角川書店.

2006 『大地の声——アメリカ先住民の知恵のことはば』大修館書店.

イーグル, D. C.

1983 『ウィンター・カウント——スー族の酋長が記したアメリカ・インディアンの歴史』（神田英次訳）誠文堂新光社.

石井泉美

2001 “‘Not A Wigwam Nor Blanket Nor Warwhoop’: Cherokees and the Woman’s Christian Temperance Union,” 『アメリカ・カナダ研究』18（上智大学アメリカ・カナダ研究所）, pp. 1-15.

2005 “Surviving Colonization: Native American Women and Their Lives,” 『言語文化』（同志社大学）7(4), pp. 597-611.

2006 「ジェンダーの視点から考察する America Indian の社会」『言語文化』（同志社大学）9(2), pp. 323-343.

石山徳子

2004 『米国先住民文化と核廃棄物——環境正義をめぐる闘争』明石書店.

一之宮久

1981 『帰ってきたナバホ——アメリカ・インディアン探訪記』三一書房.

1986 『わが聖地を守れ！——ナバホ・インディアンの強制転住』三一書房.

伊藤 聡

1981 「アメリカ・インディアン復権運動と英語」『時事英語研究』（研究社）36(3), pp. 64-66.

1983 「アメリカ・インディアンと英語教育 I —— Kennedy Report と Rock Point Community School」『名古屋短期大学研究紀要』（名古屋短期大学出版部）21, pp. 39-63.

1984 「アメリカ・インディアンと英語教育 II ——英語強制から二言語併用教育へ」『名古屋短期大学研究紀要』（名古屋短期大学出版部）22, pp. 1-27.

- 1993a 「映画『ダンス・ウィズ・ウルヴズ』の評価をめぐって」『泉』（愛知学泉大学文人研究会）4, pp. 1-13.
- 1993b 「英語句から探るインディアン・白人関係小史」『泉』（愛知学泉大学文人研究会）6, pp. 65-106.
- 1995 「アメリカ・インディアン諸言語——政府による政策の歴史および維持・発展活動について」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）9(2), pp. 283-298.
- 1996 「原住アメリカ人言語法——解説および翻訳」『泉』（愛知学泉大学文人研究会）10, pp. 229-233.
- 1997a 「アメリカ・インディアン高校生の中途退学問題について——上」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）10(3), pp. 535-558.
- 1997b 「アメリカ・インディアン高校生の中途退学問題について——中」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）11(1), pp. 113-131.
- 1997c 「アメリカ・インディアン高校生の中途退学問題について——中—続」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）11(3), pp. 463-479.
- 1997d 「アメリカ・インディアン高校生の中途退学問題について——下」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）12(1), pp. 125-136.
- 1998 「アメリカ・インディアン＝白人関係歴史年表——インディアン教育を中心として」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）13(1), pp. 67-84.
- 2003 「アメリカ・インディアン関係書誌」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）16(3), pp. 353-371.
- 2004 「翻訳の難しさについて——インディアン関係資料翻訳の場合」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）17(2・3), pp. 281-288.
- 2005 「アメリカ・インディアン犯罪の特殊性について」『経営研究』（愛知学泉大学経営研究所）19(1), pp. 1-19.

岩崎佳孝

- 1999a 「1812年戦後のインディアン政策とアンドルー・ジャクソン——1818年チカソー条約を中心に」『中・四国アメリカ学会創立25周年記念論文集』（中・四国アメリカ学会）pp. 57-71.
- 1999b 「『野蛮』の啓蒙と『文明』の受容——19世紀初頭の合衆国インディアン移住政策とインディアン部族の対応に関する一研究」『アメリカス研究』（天理大学アメリカス学会）4, pp. 145-163.
- 2000a 「白いインディアンになったイギリス人——18世紀の北米大陸におけるインディアン・トレーダーに関する一考察」『英米文化』（英米文化学会）30, pp. 127-140.
- 2000b 「火と水に囲まれて——『文明化』した合衆国南東部の部族」『インディアンの声を聞け』ワールドフォトプレス, pp. 217-222.
- 2001 「強制移住後のインディアン・テリトリーにおけるアメリカ先住民部族——チカソー族の部族内抗争と部族自治への道程」『アメリカ史研究』（アメリカ史研究会）24, pp. 1-16.
- 2004 「二〇年代の西部劇——滅び行くインディアン」英米文化学会（編）『アメリカ1920年代——ローリング・トゥエンティーズの光と影』金星堂, pp. 180-193.

- 2005 「チカソー——自決への道の模索」 富田虎男、スチュアート ヘンリ (編) 『講座世界の先住民民族——ファースト・ピーブルズの現在—— 07 北米』 明石書店, pp. 102-118.
- 岩崎佳孝、岡本勝
- 1997 「文明化に対するインディアン部族の対応—— 1820 年代におけるチカソー族文明化学校の事例」 『欧米文化研究』 (広島大学社会科学研究科) 4, pp. 21-37.
- 煎本 孝
- 1983 『カナダ・インディアンの世界から』 福音館書店.
- ウイルソン, エドマンド
- 1991 『森林インディアン イロクォイ族の戦い』 (村山優子訳) 思索社.
- ウェザーフォード, ジャック・M
- 1996 『アメリカ先住民の貢献』 (小池佑二訳) パピルス.
- ウェスト, ジェサミン
- 1976 『フォール・クリークの虐殺』 (中村妙子訳) 評論社.
- 上田伝明
- 1970a 「チェロキ憲法における土地共有制度の崩壊」 『名古屋大学法政論集』 (名古屋大学) 49, pp. 19-71.
- 1970b 「南北戦争とインディアン憲法」 『法経研究』 (静岡大学) 19(1), pp. 79-117.
- 1970c 「インディアン憲法の崩壊」 『法経研究』 (静岡大学) 19(2), pp. 65-99.
- 1971 「カイオワ族における身分制度の崩壊」 『名古屋大学法政論集』 (名古屋大学) 50, pp. 57-89.
- 1974 『インディアン憲法崩壊史研究』 日本評論社.
- 1977 「一九四六年合衆国インディアン請求委員会法について」 『法社会学』 (日本法社会学会) 29, pp. 67-79.
- 1979a "Institute for the Development of Indian Law: Indian Sovereignty, 1977 (公法学の動向)" 『法律時報』 (日本評論社) 51(1), pp. 157-159.
- 1979b 『インディアン請求委員会の研究』 法律文化社.
- 1980 「スー族インディアンと白人の土地収奪——米連邦最高裁判決を契機に」 『法学セミナー』 (日本評論社) 308, pp. 26-30.
- 1982 「メイン州インディアンによる土地請求事件と合衆国憲法」 『法経研究』 (静岡大学) 31(1・2), pp. 53-72.
- 1983 『インディアンと合衆国憲法』 法律文化社.
- 1986 「マニフェスト・デスティニと合衆国憲法——序説」 『名古屋大学法政論集』 (名古屋大学) 109, pp. 141-158.
- 1988 『マニフェスト・デスティニとアメリカ憲法』 法律文化社.
- 1994 『インディアン研究の旅』 法律文化社.
- 2001 「アメリカ原住民とアイヌ民族——二つの強制移住をとおして (1)」 『椋山女学園大学研究論集、社会科学篇』 (椋山女学園大学) 32, pp. 51-60.

- 2002 「アメリカ原住民とアイヌ民族——二つの強制移住をとおして (2)」『椋山女学園大学研究論集、社会科学篇』(椋山女学園大学) 33, pp. 221-228.

上村英明

- 1992 『先住民——「コロンプス」と闘う人びとの歴史と現在』解放出版社.

ウォッシュバーン, W. E.

- 1977 『アメリカ・インディアン——その文化と歴史』[新アメリカ史叢書、別巻] (富田虎男訳) 南雲堂.
1989 『ドーズ法とアメリカ・インディアン——インディアン部族制の崩壊』(鶴月裕典、西出敬一訳)『札幌学院大学人文学会紀要』(札幌学院大学) 45, pp. 23-91.

内田綾子

- 1999a 「ベヨーテ信仰とキリスト教——平原インディアンの文化的複合」『言語文化論集』(名古屋大学) 20(2), pp. 23-26.
1999b “The Protestant Mission and Native American Response: The Case of the Dakota Mission, 1835-1862,”『英文ジャーナル』(日本アメリカ学会) 10, pp. 153-175.
2000a 「先住アメリカ人における歴史的和解——ブラック・ヒルズとウンデッド・ニーをめぐる」『アメリカ史研究』(アメリカ史研究会) 23, pp. 77-92.
2000b 「平原インディアンのサンダンスとキリスト教——ラコタ族の場合」『言語文化論集』(名古屋大学) 21(2), pp. 23-37.
2001 「アメリカ先住民の言語復興と教育——近年の動向から」『言語文化論集』(名古屋大学) 23(1), pp. 21-35.
2004 「アメリカ先住民と記憶の景観——リトルビッグホーン戦場とサンドクリーク虐殺地」田中きく代、高木(北山)真理子(編)『北アメリカ社会を眺めて——女性軸とエスニシティ軸の交差点から』関西学院大学出版会, pp. 223-240.
2005a 「アメリカ先住民と信教の自由——ローカルな聖性をめぐって」『国際開発研究フォーラム』(名古屋大学) 29, pp. 139-152.
2005b 「シャイアン——経済開発と文化継承の間で」富田虎男、スチュアート ヘンリ(編)『講座世界の先住民——ファースト・ピーブルズの現在——07 北米』明石書店, pp. 136-149.
2006 「ショーニー・インディアン・ミッション——フロンティアにおける異文化の交差点」北米エスニシティ研究会(編)『北米の小さな博物館——「知」の世界遺産』彩流社, pp. 16-23.

鶴月裕典

- 1990a 「1830年インディアン強制移住法成立過程の一考察——白人社会内の賛否両論の検討を中心として」『札幌学院大学人文学会紀要』(札幌学院大学) 48, pp. 23-53.
1990b 「日米両国の先住民政策と強制移住」『札幌学院大学現代法研究所年報 1989』(札幌学院大学), pp. 26-33.
1991 「1830年インディアン強制移住法」(翻訳)『アメリカ研究シリーズ』(立教大学アメリカ研究所) 13, pp. 3-5.
1992 「1834年インディアン関連二法とインディアン強制移住」『札幌学院大学人文学会紀要』

- (札幌学院大学) 52, pp. 177-205.
- 1993a 「ジャクソン期インディアン領地構想についての一考察」『札幌学院大学人文学会紀要』(札幌学院大学) 53, pp. 27-52.
- 1993b 「アメリカ合衆国のインディアン政策とインディアン」『北海道とアメリカ』札幌学院大学生協同組合, pp. 177-223.
- 1993c 「合衆国のインディアン政策の展開とインディアン」歴史学研究会(編)『南北アメリカの500年』3、青木書店, pp. 38-54.
- 1993d 「ジャクソン期インディアン強制移住政策とインディアン」『常識のアメリカ・歴史のアメリカ——歴史の新たな胎動』木鐸社, pp. 151-191.
- 1994 「ジェディグアイア・モースのインディアン改革計画」『史苑』(立教大学史学会) 54(2), pp. 22-38.
- 1996 「先住民と多文化主義——帰属意識をめぐる」『アメリカ史研究』(アメリカ史研究会) 19, pp. 29-33.
- 1997 「共生の試みと挫折——インディアンの共和国と強制移住」木村靖二、上田信(編)『人と人の地域史』(地域の世界史10)山川出版社, pp. 331-374.
- 2000a 「アメリカ・インディアンの自意識の多様性」五十嵐武士(編)『アメリカの多民族体制——「民族」の創出』東京大学出版会, pp. 241-265.
- 2000b 「インディアン強制移住——不実な『父親』、抗う『子供たち』」富田虎男他(編)『アメリカの歴史を知るための60章』明石書店, pp. 99-102.
- 2000c 「インディアンの隔離と同化——『インディアン』は殺せ、『人間』は救え」富田虎男他(編)『アメリカの歴史を知るための60章』明石書店, pp. 150-153.
- 2002 「アメリカ先住民——対白人関係史の諸相」西村頼男、喜納育江(編著)『ネイティブ・アメリカンの文学』ミネルヴァ書房, pp. 2-18.
- 2006 「西部」アメリカ学会(訳編)『原典アメリカ史——社会史料集』岩波書店, pp. 94-102.
- 2007 『不実な父親・抗う子供たち——19世紀アメリカによる強制移住政策とインディアン』木鐸社.
- 鶴月裕典、西出敬一
- 1991 「1887年インディアン一般土地割当法(ドーズ法)」(翻訳)『アメリカ研究シリーズ』(立教大学アメリカ研究所) 13, pp. 6-12.
- 梅田久枝
- 1979 「アメリカ・インディアン宗教自由法」(翻訳・立法紹介)『外国の立法』(国立国会図書館調査立法考査局) 18(2), pp. 76-79.
- 大島良行
- 1993 「インディアン戦争に対する白人の反応——1」『専修人文論集』(専修大学学会) 52, pp. 1-34.
- 1994 「インディアン戦争に対する白人の反応——2」『専修人文論集』(専修大学学会) 53, pp. 121-142.
- 1998 「『インディアン戦争』の原点」『専修人文論集』(専修大学学会) 63, pp. 1-19.

大貫良夫（編）

1995 『モンゴロイドの地球5 ——最初のアメリカ人』東京大学出版会.

岡田章雄

1950 「ヴァージニアの探検と土人の小舟」『日本歴史』（日本歴史学会）27, pp. 26-29.

岡田宏明

1969 「アメリカ・インディアン」大橋健三郎（編）『講座アメリカの文化』2, 南雲堂, pp. 71-95.

1971 「アメリカ・インディアン——接触による変化」本間長世他（編）『現代アメリカ論』（東京大学出版会）, pp. 28-45.

1979 『文化と環境——エスキモーとインディアン』北海道大学図書刊行会.

小塩和人

2002 「インディアン・カジノ」赤尾千波他（編）『21世紀アメリカ社会を知るための67章』明石書店, pp. 103-106.

小野 修

1979 「ネブラスカのインディアン——その征圧の過去と現在」『主流』（同志社大学）40, pp. 80-104.

折原卓美

1985 「初期連邦インディアン政策下における土地投機——インディアナ北部における事例研究」（社会経済史学会）『社会経済史学』51(5), pp. 589-627, 704.

加藤恭子

1974 『消された大酋長——アメリカ建国のかげに』朝日新聞社.

1983 『最初のアメリカ人——メイフラワー号と新世界』福武書店.

1991 『大酋長フィリップ王——消されたアメリカ・インディアン』春秋社.

加藤信重

1994 「アメリカバイソンとアメリカ先住民」『独協大学教養語学研究』（獨協大学学術研究会）28(2), pp. 19-28.

加藤普章

1990 『多元国家カナダの実験——連邦主義・先住民・憲法改正』未来社.

鎌田 遵

2006 「「辺境」の抵抗——核廃棄物とアメリカ先住民の社会運動」御茶の水書房.

菊池東太

1987 『ジェロニモ追跡』草思社.

岸上伸啓

1998 『極北の民カナダ・イヌイット』弘文堂.

1999 「カナダ・イヌイットはなぜ都市をめざすのか——モントリオール地区の事例を中心に」

青柳清孝、松山利夫（編）『先住民と都市——人類学の新しい地平』青木書店、pp. 195-212.

2005 『イヌイト——「極北の狩猟民」のいま』中央公論新社.

北沢方邦

1976 『ホビの太陽——現代文明批判』研究社出版.

1992 『蛇と太陽とコロンプス——アメリカインディアンに学ぶ脱近代化』農山漁村文化協会.

1996 『ホビの聖地へ——知られざる「インディアンの国」』東京書籍.

木村和男

2000 『毛皮交易から生まれた『新しい民族』——カナダの混血先住民メイティの誕生』『歴史と地理』（山川出版社）539, pp. 1-12.

2002 『カヌーとビーヴァーの帝国——カナダの毛皮交易』山川出版社.

2004 『毛皮交易が創る世界——ハドソン湾からユーラシアへ』岩波書店.

2005 『メイティ——カナダの混血先住民』富田虎男、スチュアート ヘンリ（編）『講座世界先住民族——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』明石書店、pp. 340-353.

2007 『北太平洋の「発見」——毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』山川出版社.

木村武史

2000 『北米先住民ホティノンションニ（イロクォイ）神話の研究』大学教育出版.

2004 『ホデノショニ（イロクォイ）社会の『宗教』』『アメリカ研究』（アメリカ学会）38, pp. 1-19.

2005 『ネイティブの諸結社——ホデノショニ連邦』綾部恒雄（編）『クラブが創った国アメリカ』（結社の世界史5）山川出版社、pp. 72-83.

キャップス、ベンジャミン

1976 『大西部物語「インディアン」』（大島良行監修）タイム ライフ ブックス.

キュー、D 他

1990 『北西海岸インディアンの美術と文化』（菊池徹夫他訳）六興出版.

久保田泰夫

1979 『ロージャー・ウィリアムズとロード・アイランド植民地の成立V——草創期のプロヴィデンスとピーコット戦争』『山梨大学教育学部研究報告（第一分冊、人文社会科学系）』（山梨大学教育学部）30, pp. 29-38.

クラム、スティーブン・J

2001 『アメリカ先住民ウエスタン・ショショニの歴史』（斎藤省三訳）明石書店.

グリーンデ・Jr., ドナルド・A 他

2006 『アメリカ建国とイロコイ民主制』（星川淳訳）みすず書房.

クローバー、シオドーラ.

1970 『イシー北米最後の野生インディアン』（行方昭夫訳）岩波書店.

黒岩 裕

- 1993 「日米少数民族比較論——アイヌとアメリカ・インディアン」『神田外語大学紀要』（神田外語大学）5, pp. 167-197.
- 2001 「ナバホ・コミュニティ・カレッジ——民族自決と多文化教育の試み」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』（青山学院女子短期大学総合文化研究所）9, pp. 193-206.

クロノン, ウィリアム

- 1995 『変貌する大地——インディアンと植民者の環境史』（佐野敏行、藤田真理子訳）勁草書房.

コスター, ジョン

- 1977 『この大地、わが大地——アメリカ・インディアン抵抗史』（清水知久訳）三一書房.

小谷凱宣、岡田宏明

- 1984 「北アメリカ」大貫良夫（編）『民族交錯のアメリカ大陸』（民族の世界史13）山川出版社. pp. 37-93.

小山, スーザン

- 1995 『アメリカ・インディアン死闘の歴史』三一書房.
- 1996a 『白人の国、インディアンの国土——正義と賭博の部族国家』三一書房.
- 1996b 『インディアン・カントリー心の紀行』三一書房.

小山起功

- 1985 「『赤い白人』と黒い奴隷たち——チェロキー社会における黒人奴隷制の導入経緯」『専修大学人文科学研究月報』（専修大学人文科学研究所）103・104, pp. 1-21.

斎藤憲司

- 1993 「合衆国法典第25編インディアン（抄）」（翻訳・立法紹介）『外国の立法』（国立国会図書館調査立法考査局）32(2・3), pp. 170-207.

斎藤省三

- 2005 「シヨシヨニ——砂漠に生きる民」富田虎男、スチュアート ヘンリ（編）『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルズの現在—— 07 北米』明石書店, pp. 150-162.

坂本ひとみ

- 1996 「アメリカ先住民の歴史における女性達（1）」『東洋女子短期大学紀要』（東洋女子短期大学）28, pp. 53-69.
- 1997 「アメリカ先住民史における女性たち」渡辺和子（編）『アメリカ研究とジェンダー』世界思想社, pp. 66-82.
- 2002 「カジノ・エコノミクスがアメリカ先住民に与えた影響」『東洋女子短期大学紀要』（東洋女子短期大学）34, pp. 13-25.

佐々木伝太郎

- 1965 「カスター隊全滅——アメリカ西部開拓史の一齣」『拓殖大学論集』（拓殖大学研究所）

46・47, pp. 319-346.

佐藤 円

- 1990 「強制移住政策下のチェロキー族——大族長ジョン・ロスのリーダーシップをめぐる」『史苑』（立教大学史学会）50(1), pp. 85-109.
- 1991 「アメリカ・インディアン史関係邦訳史料一覧」『アメリカ研究シリーズ』（立教大学アメリカ研究所）13, pp. 46-52.
- 1994 「北アメリカ先住民の人口推定」『史苑』（立教大学史学会）54(2), pp. 181-193.
- 1997 「チェロキー族における部族政府の組織化——一八世紀の初頭から一八二〇年代まで」『法政史学』（法政大学史学会）49, pp. 31-57.
- 1998 「寡頭制か民主制か——強制移住以前のチェロキー族の政治体制に関する評価をめぐる」『法政史学』（法政大学史学会）50, pp. 104-139.
- 2000a 「先住アメリカ人の文化——その地域的広がり多様性」富田虎男他（編）『アメリカの歴史を知るための60章』明石書店, pp. 16-19.
- 2000b 「1492年の先住民人口——異なる推定値が意味するもの」富田虎男他（編）『アメリカの歴史を知るための60章』明石書店, pp. 20-23.
- 2001 「チェロキー族の女性と『文明化』」『大妻比較文化』2, pp. 77-97.
- 2004a 「強制移住以後のチェロキー族における立法と女性の地位」『大妻比較文化』（大妻女子大学比較文化学部）5, pp. 76-99.
- 2004b 「マイノリティ——先住アメリカ人とアフリカ系アメリカ人」朝日由紀子他（編）『アメリカ文化への招待——テーマと史料で学ぶ多様なアメリカ』北星堂, pp. 103-138.
- 2005a 「チェロキー——混血と強制移住が生み出した多様性」富田虎男、スチュアートヘンリ（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』明石書店, pp. 69-85.
- 2005b 「セミノールとミコソーキ——経済発展がもたらす光と影」富田虎男、スチュアートヘンリ（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』明石書店, pp. 86-101.
- 2005c 「インディアンと『人種』イデオロギー——チェロキー族の黒人奴隷制を事例に」川島正樹（編）『アメリカニズムと『人種』』名古屋大学出版会, pp. 88-112.
- 2006 「先住民と植民者の出会い」アメリカ学会（訳編）『原典アメリカ史——社会史料集』岩波書店, pp. 52-60.
- 2007 「先住アメリカ人——アフリカ系アメリカ人関係史研究の可能性」『大妻比較文化』（大妻女子大学比較文化学部）8, pp. 5-23.

里内克巳

- 2001 「歴史のトラウマを書く——アリス・キャラハン『ワイネマ』とアメリカ・インディアン史」『言語文化研究』（大阪大学言語文化部）27, pp. 381-397.

佐野 実

- 1977 「真実と虚構の間——『インディアン部落』で起きたこと」『静岡大学教養部研究報告。人文科学編』（静岡大学教養部）13, pp. 173-191.

猿谷 要

- 1973 「インディアンの逆襲——白人の書いた歴史に挑戦するレッド・パワー」『芸芸春秋』（芸芸春秋）51(7), pp. 178-188.

猿谷 要 (訳)

- 1989 「インディアンの権利の主張（1969年）」大下尚一他（編）『史料が語るアメリカ——メイフラワーから包括通商法まで—— 1584 - 1988』有斐閣, pp. 242-243.

澤田俊明

- 1992 「1600年代のイギリス人によるニューイングランドへの遠征——インディアンとの出会いを中心に」『研究論叢』（京都外国語大学）39, pp. 1-16.
- 1993 「17世紀初期のアプナキ族」『同志社アメリカ研究』（同志社大学アメリカ研究所）29, pp. 37-45.
- 1994 「1610年代のニューイングランド——アメリカ先住民の状況を中心に」『研究論叢』（京都外国語大学）43, pp. 23-37.
- 1996 「19世紀前半のクロウ族——毛皮交易者との関係を中心に」『SELL』（京都外国語大学）12, pp. 157-171.
- 1998 「1850年代のクロウ族」『SELL』（京都外国語大学）14, pp. 119-136.
- 1999a 「ブラックフィート族と毛皮交易」『Problemata mundi』（京都外国語大学）8, pp. 1-14.
- 1999b 「1860年代のボズマン・トレールとクロウ族」『文化史学』（文化史学会）55, pp. 527-537.
- 2002 「19世紀前半のブラックフィート族とアメリカ人」『SELL』（京都外国語大学）19, pp. 57-68.
- 2004 「1850年代のブラックフィート族」『SELL』（京都外国語大学）21, pp. 39-49.
- 2005 「ベノブスコットとバサマコディ——土地の回復を求めて」富田虎男、スチュアート・ヘンリ（編）『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』明石書店, pp. 39-52.

高川雅史

- 1978 「ジェファソンとインディアン問題」『アメリカ研究』（アメリカ学会）12, pp. 163-181.
- 1990 「アメリカ革命の論理とインディアンの論理」『立教女学院短期大学紀要』（立教女学院短期大学）22, pp. 53-75.

清水忠重

- 1995 「トマス・ジェファソンのインディアン論」『神戸女学院大学論集』（神戸女学院大学）41(3), pp. 21-39.

清水知久

- 1968 『アメリカ帝国』亜紀書房.
- 1971 『アメリカ・インディアン——「発見」からレッド・パワーまで』中央公論社.
- 1986 『米国先住民の歴史——インディアンと呼ばれた人びとの苦難・抵抗・希望』明石書店.
- 1992 『増補米国先住民の歴史——インディアンと呼ばれた人びとの苦難・抵抗・希望』明石

書店.

下山 晃

- 1990 「植民期アメリカの毛皮交易——インディアン奴隷制の展開にふれて」(共同研究「資本主義世界経済と労働の諸形態」)『社会科学研究年報』(龍谷大学) 20, pp. 58-80.
- 1993 「毛皮交易史の研究(1)——毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度」『社会科学』(同志社大学) 51, pp. 31-59.
- 1994 「毛皮交易史の研究(2)——毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度」『社会科学』(同志社大学) 52, pp. 17-47.
- 1995 「毛皮交易史の研究(3)——毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度」『社会科学』(同志社大学) 54, pp. 217-244.
- 1996 「毛皮交易史の研究(4)——毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度」『社会科学』(同志社大学) 57, pp. 229-257.
- 1997 「毛皮交易史の研究(5)——毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度」『社会科学』(同志社大学) 58, pp. 85-120.
- 2005 『毛皮と皮革の文明史——世界フロンティアと掠奪のシステム』ミネルヴァ書房.

ジャカン, フィリップ

- 1992 『アメリカ・インディアン——奪われた大地』(富田虎男監訳) 創元社.

白井洋子

- 1981 「ペンシルヴェニアのインディアン・トレーダー研究について——1750, 60年代を中心に」『アメリカ史研究』(アメリカ史研究会) 4, pp. 25-36.
- 1987 「毛皮の道から『帝国』へ——北米大陸における毛皮交易の役割」『歴史評論』(歴史科学協議会) 445, pp. 72-80.
- 1989 「『友好の森』の遺産——ペンシルベニア植民地のインディアン政策」本田創造(編)『アメリカ社会史の世界』三省堂, pp. 291-325.
- 1991 「オハイオ交易とインディアン戦争——ペンシルベニア植民地のインディアン交易政策, 1722 - 1754」『東京国際大学論叢教養学部編』(東京国際大学) 44, pp. 1-18.
- 1992 「北米先住民のみた『新世界』——17世紀初期の先住民社会とキリスト教布教活動」『アメリカ研究』(アメリカ学会) 26, pp. 27-48.
- 1994 「アメリカ革命とインディアン——デラウェア族・モラビア教徒・北西部」『史苑』(立教大学史学会) 54(2), pp. 1-21.
- 1995 「北米先住民とアメリカ史教育」『歴史教育研究』(歴史教育研究所) 77, pp. 17-25.
- 1996 「アメリカ(合衆国)史の神話とインディアン——スミソニアン「西漸するアメリカ」展をめぐる論争の意味するもの」比較史・比較歴史教育研究会編『黒船と日清戦争——歴史認識をめぐる対話』未來社, pp. 46-59.
- 1998 「インディアン征服戦争としての独立戦争」『戦争と女性——アメリカ史における戦争と女性に関する多文化主義的社会史研究』(文部省科学研究費助成研究成果報告書), pp. 11-18.
- 1999 「先住アメリカ人」高村宏子他(編)『アメリカ合衆国とは何か——歴史と現在』雄山閣出版, pp. 108-121.

- 2000 「神聖な実験——ウィリアム・ベンの先住民友好政策」 富田虎男他（編）『アメリカの歴史を知るための60章』 明石書店, pp. 47-50.
- 2003 「文化復権を求めて——先住アメリカ人のあゆみ」 有賀夏紀、油井大三郎（編）『アメリカの歴史——テーマで読む多文化社会の夢と現実』 有斐閣, pp. 84-99.
- 2006 「アメリカ史のなかのベトナム戦争」 白井洋子 『ベトナム戦争のアメリカ——もう一つのアメリカ史』 刀水書房, pp. 83-120.
- 新開 禎子
- 1986 「ニューヨークに生きるアメリカン・インディアン」 『汎』（PMC 出版）2, pp. 28-61.
- 新保 満
- 1968 『カナダ・インディアン——滅びゆく少数民族』 三省堂.
- 1993 『カナダ先住民デネーの世界——インディアン社会の変動』 明石書店.
- 1999 「デネー社会の変容——都市移住を志向する先住民社会」 青柳清孝、松山利夫（編）『先住民と都市——人類学の新しい地平』 青木書店, pp. 180-194.
- 鈴木健司
- 1998 「国家の中の国家——先住民の『主権ケベック』分割論」 森川真規雄（編）『先住民、アジア系、アカディアン——変容するカナダ多文化社会』 行路社, pp. 113-147.
- 2003 「カナダ先住民の権利と平等権の対立——排他的先住民漁業への違憲判決から」 『同志社女子大学学術研究年報』（同志社女子大学）54(2), pp. 387-399.
- 2005 「ケベック＝先住民関係の新しい展開——1995年以降のクリーの動向をめぐって」 『同志社女子大学学術研究年報』 56, pp. 27-35.
- 2006 「カナダ先住民統治の二面性原理——FNGA 法案 C-7 の挫折に見る支配と保護」 『総合文化研究所紀要』（同志社女子大学総合文化研究所）23, pp. 21-32.
- 鈴木重吉
- 1984 「日本初の公式英語教師 R. マクドナルドが利尻島に上陸した日」 『週刊時事』（時事通信社）649, pp. 68-73.
- 鈴木 透
- 2004 「Little Bighorn Battlefield National Monument の誕生——カスター神話の解体と現代アメリカにおけるパブリック・メモリーの再構築をめぐって」 『教養論叢』（慶應義塾大学）121, pp. 27-42.
- 2005 「生まれ変わる古戦場——カスター神話の解体と先住インディアンの記憶の復権」 近藤光雄、鈴木透他 『記憶を紡ぐアメリカ——分裂の危機を超えて』 慶應義塾大学出版会, pp. 87-132.
- スチュアート ヘンリ
- 1991 『北アメリカ大陸先住民の謎』 光文社.
- 1997 「北部ケベックの先住民——二つのマジョリティに翻弄されるイヌイットとインディアン」 西川長夫他（編）『多文化主義・多言語主義の現在——カナダ・オーストラリア・そして日本』 人文書院, pp. 109-132.
- 1998 「先住民民族が成立する条件——理念から現実への軌跡」 清水昭俊（編）『周辺民族の現在』

世界思想社, pp. 235-263.

- 1999 「都市の『インディアン』——カナダとアメリカの政策と先住民の都市化」青柳清孝、松山利夫(編)『先住民と都市——人類学の新しい地平』青木書店, pp. 163-179.

スティア, ダイアナ

- 1999 『アメリカ先住民女性——大地に生きる女たち』(鈴木清史、渋谷瑞恵訳) 明石書店.

高橋順一

- 2002 『はるかなるオクラホマ——ネイティブ・アメリカン・カイオワ族の物語りと生活』はる書房.

竹中 豊

- 1983a 「カナダ先住民観の変遷——その虚像と実像」『比較法政』(近畿大学比較法・政治研究所) 22, pp. 99-142.

- 1983b 「歴史の中の異文化接触——17世紀カナダの場合」『カナダ研究年報』(日本カナダ学会) 4, pp. 62-77.

谷本和子

- 1998 「アメリカ・インディアンのアイデンティティ」清水昭俊(編)『周辺民族の現在』世界思想社, pp. 212-234.

ツェーラム, C. W.

- 1974 『最初のアメリカー人——北アメリカ考古学物語』(寺田和夫他訳) 新潮社.

土井幸一郎

- 2002 「日系アメリカ人収容所とインディアン政策——2つの少数民族政策の交錯」『商学論集』(福島大学経済学会) 70(3), pp. 3-26.

デイ多佳子

- 1998 『アメリカインディアンの現在——女が見た現代オグララ・ラコタ社会』第三書館.

手島武雅

- 1987 「合衆国の対インディアン政策——特にその連続性」『アメリカ史研究論集』(九州・山口アメリカ研究会) 3, pp. 1-24.

東大北米原住民研(編)

- 1978 「もっとインディアンについて知りたい人のための手引」『宝島』6(2), pp. 58-65.

所 勇

- 1973 「アメリカの原住民インディアンの一考察」『光華女子短期大学研究紀要』(光華女子短期大学) 11, pp. 58-76.

徳井いつこ

- 2000 『インディアンの夢のあと——北米大陸に神話と遺跡を訪ねて』平凡社.

ドッグ, マリー・クロウ

- 1995 『ラコタ・ウーマン』(リチャード・アードス編、石川史江訳) 第三書館.

富田虎男

- 1964 「黎明期のアメリカ——ジェファソンのデモクラシーとジャクソンのデモクラシー」『歴史教育』（歴史教育研究会）12(11), pp. 43-50.
- 1968 「連合会議のインディアン政策」『アメリカにおけるコンフォーミティの形成研究会会報』, pp. 14-20.
- 1969a 「アメリカ・インディアンの歴史と文化」『合衆国の発展』（世界歴史シリーズ 17）世界文化社, pp. 193-200.
- 1969b 「ジェファソンと農本主義」齋藤眞（編）『講座アメリカの文化』3, 南雲堂, pp. 85-120.
- 1970 「北米植民地」講座『世界歴史』編集委員会（編）『岩波講座世界歴史 16（近代3）』岩波書店, pp. 234-292.
- 1974 「イギリス帝国下の植民地（1600～1775年）」『アメリカ帝国の形成（1770～1820年代）』（以上単著）『アメリカ帝国の確立（1828～1877年）』（清水知久と共著）清水知久、高橋章、富田虎男『アメリカ史研究入門』山川出版社, pp. 1-193.
- 1977 「アンドルー・ジャクソン」『アメリカ研究』（アメリカ学会）11, pp. 16-31.
- 1979a 「幕末期の漂流者ラナルド・マクドナルドと音吉——その1」『歴史公論』（雄山閣）44, pp. 130-136.
- 1979b 「幕末期の漂流者ラナルド・マクドナルドと音吉——その2」『歴史公論』（雄山閣）45, pp. 142-152.
- 1979c 『マクドナルド「日本回想記」——インディアンの見た幕末の日本』刀水書房.
- 1980 「イギリス帝国下の植民地（1600～1775年）」『アメリカ帝国の形成（1770～1820年代）』（以上単著）『アメリカ帝国の確立（1828～1877年）』（清水知久と共著）清水知久、高橋章、富田虎男『アメリカ史研究入門（第2版）』山川出版社, pp. 1-193.
- 1982a 『アメリカ・インディアンの歴史』雄山閣.
- 1982b 「レッド・パワー」アメリカ学会（訳編）『原典アメリカ史』7、岩波書店, pp. 454-467.
- 1983 「第二次世界大戦下のマイノリティ・グループ——アメリカ・インディアンの場合」（研究成果報告書）『第二次世界大戦下のアメリカ社会』東京大学アメリカ研究資料センター, pp. 45-53.
- 1984 「ボカホンタス」『自由の天地』（人物のアメリカ史1）集英社, pp. 31-56.
- 1985 「インディアン征服戦争」猿谷要編『アメリカの戦争』（世界の戦争8）講談社, pp. 101-148.
- 1986a 『アメリカ・インディアンの歴史』（改訂版）雄山閣.
- 1986b 「日本人のアメリカ・インディアン像——その1. 徳川時代のインディアン像」『アメリカ研究シリーズ』（立教大学アメリカ研究所）8, pp. 1-14.
- 1989 「北海道旧土人保護法とドーズ法——比較史的研究の試み」『札幌学院大学人文学会紀要』（札幌学院大学人文学会）45, pp. 5-21.
- 1990 「北海道旧土人保護法とドーズ法——ジョン・パチェラー、白仁武、バラビタ、サンロッチ」『札幌学院大学人文学会紀要』（札幌学院大学人文学会）48, pp. 1-22.
- 1993a 「開拓イデオロギーとインディアン」『歴史学研究』（歴史学研究会）647, pp. 1-10.
- 1993b 「タンガロとジュジロー」『史苑』（立教大学史学会）53(2), pp. 1-5.

- 1993c 「ナバホ・インディアン暗号部隊」『歴史群像』（学習研究社）10, pp. 160-165.
- 1997 『アメリカ・インディアン歴史』（第3版）雄山閣.
- 2000a 「最古のアメリカ人——モンゴロイドのアジアからの移動」富田虎男他（編）『アメリカの歴史を知るための60章』明石書店, pp. 12-15.
- 2000b 「ヴァージニア植民地の建設——先住民インディアン側から見ると」富田虎男他（編）『アメリカの歴史を知るための60章』明石書店, pp. 31-34.
- 2000c 「ニューイングランド植民地の建設——『友好』の神話」富田虎男他（編）『アメリカの歴史を知るための60章』明石書店, pp. 35-38.
- 2000d 「ペーコンの反乱とインディアン奴隷制——赤人と白人と黒人」富田虎男他（編）『アメリカの歴史を知るための60章』明石書店, pp. 39-42.

富田虎男（訳）

- 1989 「テクムセのヴィンセンスでの演説（1810年）」大下尚一他（編）『史料が語るアメリカ——メイフラワーから包括通商法まで』有斐閣, p. 67.

富田虎男他（訳）

- 1992 「欧米諸国のアメリカ・インディアン政策」（W. E. ウォッシュバーン編『インディアン・白人関係史』の抄訳）『アメリカ研究シリーズ』（立教大学アメリカ研究所）14.

富田虎男、スチュアート ヘンリ（編）

- 2005 『講座世界の先住民族——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』明石書店.

トレナート・Jr., ロバート・A

- 2002 『アメリカ先住民アリゾナ・フェニックス・インディアン学校』（斎藤省三訳）明石書店.

ナイハルト, J. G.

- 1973 『終わりなき夢と闘い——あるインディアンの生涯』（大島良行訳）合同出版.
- 1977 『ブラック・エルクは語る——スー族聖者の生涯』（弥永健一訳）社会思想社.
- 2001 『ブラック・エルクは語る』（宮下嶺夫訳）めるくまー.

中村 敬

- 1990 「アメリカ・インディアンの差別と言語の問題」『成城文藝』（成城大学文芸学部）129, pp. 46(11)-29(28).

名古忠行

- 1972 「ジェファソンの寛容思想と少数民族問題」『木野評論』（京都精華短期大学）3, pp. 35-47.

ナッシュ, ロデリック

- 1989 「テクムシ——史上初のインディアン連合を組織した天才」ロデリック・ナッシュ『人物アメリカ史』上巻（新潮社）, pp. 156-192.

西出敬一

- 1986 「アメリカ合衆国と先住民」『北海道と先住民』札幌学院大学学生生活協同組合, pp. 1-59.

ぬくみちほ

- 2004 「ナバホ——母なる大地に生きるディネエ」富田虎男、スチュアート・ヘンリ（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在——07 北米』明石書店, pp. 178-193.

野口久美子

- 2003 「ホビ族とインディアン再組織法(1934年)——部族憲法と部族会議の設立をめぐる」『立教アメリカン・スタディーズ』(立教大学アメリカ研究所) 25, pp. 91-110.
- 2005 「インディアン再組織法案審議に見るインディアン・アイデンティティの多様性——インディアン議会議事録の検討をてがかりに」『史苑』(立教大学史学会) 65(2), pp. 119-143.

バージャー, トーマス

- 1997 「カナダにおける先住民と先住民権」(ノア・マコーマック訳) 西川長夫他(編)『多文化主義・多言語主義の現在——カナダ・オーストラリア・そして日本』人文書院, pp. 133-146.

ハーシュフェルダー, アーリーン

- 2002 『ネイティヴ・アメリカン——写真で綴る北アメリカ先住民史』(赤尾秀子、小野田和子訳) BL 出版.

ハーシュフェルダー, アーリーン・B 他(編)

- 1997 『アメリカ先住民の子どもたち——父さんは太陽、母さんは大地』(愛川信子訳) 明石書店.

ハーツ, ポーラ・R

- 2003 『アメリカ先住民の宗教』(西本あづさ訳) 青土社.

ハートレー, W.、ハートレー, E.

- 1975 『征服されざる人びと——酋長オセオラとセミノール・インディアン』(鈴木主税訳) 現代史出版会.

ハミルトン, C. (編)

- 1969 『滅びゆくインディアン』(和巻耿介訳) 大陸書房(再版名『北米インディアン生活誌』社会評論社、1993年.)

原ひろ子

- 1979 『極北のインディアン』玉川大学出版部.
- 1989 『ヘヤー・インディアンとその世界』平凡社.

ハンケ, ルイス

- 1974 『アリストテレスとアメリカ・インディアン』(佐々木昭夫訳) 岩波書店.

ビーラー, アレックス・W

- 1998 『そして名前だけが残った——チェロキー・インディアン涙の旅路』(片岡しのお訳) あすなろ書房.

平野 孝(訳)

- 1989 「ジャクソンのインディアンの強制移住に関する教書(1833年)」大下尚一他(編)『史

料が語るアメリカ——メイフラワーから包括通商法まで』有斐閣, pp. 81-83.

フェイガン, ブライアン・M

1990 『アメリカの起源——人類の遙かな旅路』(河合信和訳) どうぶつ社.

藤永 茂

1972 『アメリカ・インディアン悲史——誇り高いその衰亡』朝日新聞社.

藤本 博

1984 「合衆国の領土膨張とインディアン移住政策の形成——1830年強制移住法 (Indian Removal Act) の成立背景を中心に」『札幌学院大学人文学会紀要』(札幌学院大学人文学会) 36, pp. 109-130.

ブラウン, D

1972 『わが魂を聖地に埋めよ——アメリカ・インディアン闘争史』上・下巻 (鈴木主税訳) 草思社.

ブルーカ, フランシス・ポール

1993a 「アメリカ社会とインディアン——独立革命から現代まで1」(西出敬一訳)『札幌学院大学人文学会紀要』(札幌学院大学人文学会) 53, pp. 101-126.

1993b 「アメリカ社会とインディアン——独立革命から現代まで2」(西出敬一訳)『札幌学院大学人文学会紀要』(札幌学院大学人文学会) 54, pp. 137-162.

1994 「アメリカ社会とインディアン——独立革命から現代まで3」(西出敬一訳)『札幌学院大学人文学会紀要』(札幌学院大学人文学会) 55, pp. 143-158.

ヘーガン, W. T.

1983 『アメリカ・インディアン史』(西村頼男他訳) 北海道大学図書刊行会.

1984 『アメリカ・インディアン史』[改訂版] (西村頼男他訳) 北海道大学図書刊行会.

1998 『アメリカ・インディアン史』[第3版] (西村頼男他訳) 北海道大学図書刊行会.

ホーク, B

1996a 「北米先住民ブラック・ホークの自伝 (1)」(西村頼男訳)『阪南論集 (人文・自然科学編)』(阪南大学) 32(1), pp. 13-22.

1996b 「北米先住民ブラック・ホークの自伝 (2)」(西村頼男訳)『阪南論集 (人文・自然科学編)』(阪南大学) 32(3), pp. 41-52.

ホロウエイ, デヴィッド

1976 『ルイスとクラーク』(池央耿訳) 草思社.

本多勝一

1970 『アメリカ合衆国』朝日新聞社.

1972 『カナダ・エスキモー』すずさわ書店.

本間長世 (解説)

1977 『アメリカ・インディアン』[アメリカ古典文庫 14] (平野孝訳) 研究社.

マードック, デヴィッド

- 1995 『アメリカ・インディアン』[ビジュアル博物館 60] (富田虎男監修、吉枝彰久訳) 同朋舎出版
- マクガバーン、アン
- 1991 『三人の偉大なインディアン』(ジーン・デビス、池田広子訳) 信山社.
- 馬籠久美子
- 1999 「美しき道の教え——北米・ディネの強制移住問題」原田勝弘他(編)『環太平洋先住民の挑戦——自治と文化再生をめざす人びと』明石書店, pp. 19-61.
- マシーセン、ピーター
- 2003 『インディアン・カンントリー——土地と文化についての主張』上・下(澤西康史訳) 中央アート出版社.
- 松隈 清
- 1978 「アメリカ・インディアンと国際法の起源——フランシスコ・ピトリアを訪れて」(資料)『八幡大学論集』(八幡大学法経学会) 28(2・3), pp. 65-90.
- 松島駿二郎
- 1985 『シヨシヨニ族の魂——もうひとつのアメリカ開拓史』筑摩書房.
- 三崎敬之
- 1953 「ピークォット戦争」『愛媛大学紀要』(第1部人文学部) 1(4), pp. 323-333.
- 水野由美子
- 1997 「異文化としての学校——ニューディール期の教育改革とナバホ族」『アメリカ史研究』(アメリカ史研究会) 20, pp. 58-74.
- 1998 “*Dine bi Olta* or School of the Navajos: Educational Experiments at Rough Rock Demonstration School, 1966-1970,” 『英文ジャーナル』(アメリカ学会) 9, pp. 143-169.
- 2000 「『滅びゆくインディアン』から『レッド・アトランティス』へ——1920年代のニューメキシコ州プエブロと先住民政策改革運動」『アメリカ研究』(アメリカ学会) 34, pp. 193-209.
- 2002 「1920年代の『トライバル・ダンス』論争——その展開と歴史的意義」『一橋論叢』(一橋大学一橋学会) 128(2), pp. 134-152.
- 2003 「ヌエボ・メヒコからニューメキシコへ——合衆国による併合とネイティヴ国家関係の再編過程」油井大太郎、遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ——世界史の中のアメリカニゼーション』東京大学出版会, pp. 138-156.
- 2004 「『変則的存在』から『インディアン市民』へ——1920年代の連邦議会におけるナヴァホ政策論争」『言語文化論集』(名古屋大学) 26(1), pp. 135-153.
- 2005 「プエブロ——文化継承のための戦略と課題」富田虎男、スチュアート・ヘンリ(編)『講座世界の先住民民族——ファースト・ピーブルズの現在——07北米』明石書店, pp. 163-177.
- 2006 「国民の境界の再構築」アメリカ学会(訳編)『原典アメリカ史——社会史史料集』岩波書店, pp. 254-264.

宮岡伯人

1987 『エスキモー——極北の文化誌』 岩波書店.

宮下敬志

2003 「一九世紀末から革新主義時代にかけてのアメリカ東部諸改革運動の系譜——アメリカ先住民（インディアン）改革者の分析を通して」『立命館文學』 580, pp. 22-46.

ミラー, デイヴィッド・H.

1967 『カスター將軍の最期』（高橋泰邦訳）早川書房.

ミラー, R・J

1993 「北部と先住民」（横山久美子訳）ダグラス・フランシス、木村和男（編）『カナダの地域と民族——歴史のアプローチ』 同文館出版, pp. 223-256.

ムーニー, ジェイムズ

1989 『ゴースト・ダンス——アメリカ・インディアンの宗教運動と叛乱』（荒井芳廣訳）紀伊国屋書店.

森田ゆり

1989 『聖なる魂——現代アメリカ・インディアン指導者デニス・バンクスは語る』朝日新聞社.

横須賀孝弘

1991 『ハウ・コラ——インディアンに学ぶ』日本放送出版協会.

1992a 「インディアンの文化——その衝撃」『ユリイカ』（書肆ユリイカ）24(3), pp. 66-75.

1992b 「北米インディアンに関する邦語書籍」『ユリイカ』（書肆ユリイカ）24(3), pp. 214-217.

横須賀孝弘（編）

1999 『目録・北米インディアンの本—— 1951 - 1998』私家版.

横田和憲

1986 「Self-Reliance toward Rebirth: On the World of Native Americans」『金城学院大学論集 英米文学編』（金城学院大学）114, pp.187-206.

吉田かよ子

1994 「アメリカ西部に生きた女性たち」『北星学園女子短期大学紀要』（北星学園女子短期大学）31, pp. 15-27.

ライト, ロナルド

1993 『奪われた大陸』（香山千加子訳）NTT 出版.

ラディン, ポール

1980 『あるインディアンの自伝——北米ウィネバゴ族の生活と文化』（滝川秀子訳）思索社.

ラフリン, ウィリアム

1986 『極北の海洋民 アリュート民族』（スチュアート ヘンリ訳）六興出版.

ランバート, カーメン

- 1988 「カナダ都市部における原住民のエスニシティ」(益子待也訳)綾部恒雄(編)『カナダ民族文化の研究——多文化主義とエスニシティ』刀水書房, pp. 137-169.

立教大学アメリカ研究所(編)

- 1988 『アメリカ・インディアン研究邦語文献目録 1945～1987』(『アメリカ研究シリーズ』[立教大学アメリカ研究所]10) .

レッドフォックス, W

- 1971 『白い征服者との戦い——アメリカ・インディアン酋長レッド・フォックスの回想』(秋山一夫訳)サイマル出版会.

ローランソン, メアリー、ジェームズ・E・シーヴァー

- 1996 『インディアンに囚われた白人女性の物語——I. メアリー・ローランソン夫人の捕囚と救済の物語 II. メアリー・ジェミソン夫人の生涯の物語』(白井洋子訳)刀水書房.

和智綾子

- 1999 「南カリフォルニア・インディアンと都市社会——文化保存と民族アイデンティティの諸問題」青柳清孝、松山利夫(編)『先住民と都市——人類学の新しい地平』青木書店, pp. 229-247.

